

双方向型月刊キュレーションメルマガ
“コロナ禍×イノベーション×地方創生”
2020年12月1日 #09

編集発行人: Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典
発行元: Japa 日本専門家活動協会 <http://www.japa.fellowlink.jp/>
ご相談・問合せ先: info@japa.fellowlink.co.jp

本メルマガは、Japa 日本専門家活動協会が 2020 年 4 月 1 日より毎月 1 日に発行する有料版の月刊キュレーションメルマガ「イノベーション×地方創生」としてスタートしましたが、今般のコロナ禍を受け、コロナ禍の状況、影響、対応等に強い関心が寄せられているため、よりコロナ禍を意識した「コロナ禍×イノベーション×地方創生」に拡大し、Japa 会員、寄稿者、及び会員・寄稿者の紹介による関心者の方々に、当面の間、無料配信することに致しました。忌憚のないご意見等お待ちしております。

本メルマガは、購読者(特に、自治体の首長・職員の方々、地方創生の課題解決に取り組む企業の方々)と専門家(Japa 理事・会員・寄稿者等)をつなぐ相談窓口機能を併せ持つ双方向型のキュレーションメルマガをめざしています。ご購入ご活用の程宜しくお願い致します。

INDEX

1. コラム「論点提起」: 不便に益ありや、根づく権利や如何
2. キュレーション「関連情報&Topics」: コロナ禍×イノベーション×地方創生
3. 紹介「海外に学ぶ」: 伝統的工業都市から欧州文化都市へ再生 Glasgow その2
(Japa 理事 小畑さいち: 青山学院大学元客員教授)
4. 寄稿: 故郷との新たな出会い (アーティスト・クリエイター 丸 美由紀)
5. 稽古照今・寄稿: 童謡爺さんのどうよう語り 第一話・第二話 (作詞・作曲家 高橋育郎)
6. 解説「関連データ・用語・仕組み」: テロワール、スローライフ、ロハスとは
7. Blog 仕組みの群像: 高齢者の住まい方「シニア・シェアハウス」について
8. つぶやき(編集後記に代えて)

注: 担当執筆者名の記載のない項目は、編集発行人(芝原 靖典)による。

※ Japa は「新型コロナウイルス感染症特設コーナー」<https://www.japa.fellowlink.jp/blank-25> を開設して、アーカイブすべき情報を随時アップしています。ご活用下さい。
また、アーカイブすべき情報があればご連絡ください。

1. コラム「論点提起」:不便に益ありや、根づく権利や如何

先日、大磯地方創生事業推進コンソーシアム <https://www.oiso-conso.com/> (事務局:日本専門家活動協会)の会員及び関係者の間で、「不便益」に関するやりとりが盛り上がった。

▼「すべてが便利でなくていい」京大・川上教授が研究する、世界をよくする「不便益」とは？
2019年8月7日 15時0分 <https://bit.ly/3muQVOM>

費用便益理論、効用理論を少しかじった者として、「不便益」という表記に首をかしげていたが、提唱者の川上幸司教授(京都大学)が主宰する不便益システム研究所のサイト <http://fuben-eki.jp/whatsfuben-eki/> に「不・便益ではありません。不便の益です。」と記載されている。略歴の中にも「不便の効用を活用したシステム論の展開」(2009-2013) 代表」とあることから、システム理論的には「不便の効用」、公共経済理論・費用便益理論的には「不便の便益/効用」が本来的には正しい表記なのだと思量。要するに、「不便もまた便益/効用なり」の意であり、これを「不便益」と表示するのは、「マイナスの便益・効用」の意味の「負便益」と誤解されやすい。

表記はともあれ、「不便」とは、手間暇がかかり、非効率、要するに「不便＝非効率・非生産性」というのが一般的認識ではなかろうか。それでは、効率性、生産性とは何か。

$$\text{付加価値生産性} = \frac{\text{算出(付加価値)}}{\text{投入(人件費、原材料費等)}} \quad \text{※国単位の付加価値が GDP}$$

供給者側から見れば、効率性・生産性は当然の指標と思われるが、昨今は、「分母」の人件費や原材料の原価を下げることに注力して、「分子」の付加価値を上げることが忘れられがちになっているのではなかろうか。こうした方向での究極が国際間のギャップを狙うグローバル金融資本主義であり、それは国際的に富の偏在と大きな格差を生む。その反省として、SDGs(理念:誰も取り残さない)が生まれたとも云える。

一方、需要者側(消費者、生活者)からみれば、生活者の生活の豊かさの追求のため、基本となる生活のしやすさの障害の削減(ストレスフリー)が希求された。交通手段の開発・普及が移動のストレス解消、生活道具の開発・普及が暮らしのストレス解消、さらには通信手段の開発・普及がコミュニケーションのストレス解消、等々。最近、自

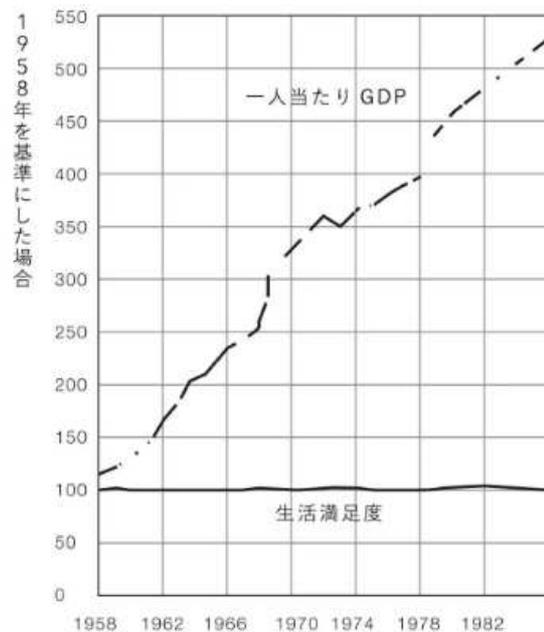


図 戦後日本における「一人当たりGDP」と「生活満足度」の推移
出典:Diener and Biswas-Diener. (2002), Social Indicators Research. 57:2: 119-169
出所:「よい人生とは何か?」をめぐる三段論法:石川善樹 WIRED 2019.05.13

動運転車、ドローン、スマートシティ/スーパーシティの開発・普及も喧伝されている。

こうした経緯の結果、経済成長はしたけれど、幸福度 Well-Being は戦後以来、横ばいであると報告されている。これは何を意味するか、改めて考える必要がある。

不利益論は、効率性追求、ストレスフリー追求による過剰品質・サービスを改め、適度なストレス(不快感)を残し、その残されたストレスに別の価値感に基づく価値を見いだすと云うことかもしれない。あるいは、そうしたことを意図して「デザイン」と云うことかもしれない。超高齢社会において、ストレスフリーにしすぎると、かえって心身の衰退を招くので、あえてストレス(負荷)になる仕掛けを残すというのが一つの事例である。

こうして考えると、社会・文化の熟度、心身の程度に応じて、適度なストレス(負荷、不快感)をいかにかけるか、そのストレスを如何に心地よく感じられるか。便利・不便あるいは効率性という「ものさし」(価値基準)ではなく、ストレスも含めてサービスあるいはモノの利用・所有に対価を払う価値があるかどうか問われている。

更に云えば、昨今は、ヤフオクやメルカリに代表される売買のプラットフォームを使用すればだれもが供給者と需要者になれる。クラウドファンディングのプラットフォームを使えば誰もが投資家になれる。ふるさと納税の仕組みを使えば、行政に代わって、税金の一部ではあるがその用途を地域・目的指定できる。これらは今までになかった立ち場の多様性であり、価値観の多様性を励起する。

これを都市と地方の関係という観点から見たとき、フランスが EC 統合の政治的理念として主張したと云われる「根ざす権利<地方の論理>」と「選ぶ権利<都市の論理>」を想起する。

資料:「小林潔司 土木学会長 2018.10 月号 会長からのメッセージ」

人々の選択の結果として生まれる集積の力が都市力である。こうした集積の力に対抗するには、土地に根ざしたアイデンティティをつくるしかなく、自然由来の資源やその地域に蓄積される技術・文化、その結びつきがあって初めて根ざす権利が生まれるとされている。

この根ざす権利の源泉となるアイデンティティは多様であり、そこにこそ地方・地域それぞれの良さ、幸福度 Well Being、あるいは「テロワール」と云う付加価値かもしれない。こうしたことは、行財政効率を指向して市町村合併して大きくなりすぎた基礎自治体ではなく、ヒューマンスケールな地方・地域でこそ可能かもしれない。

コロナ禍が惹起した移動制限、ソーシャルディスタンスは、効率性至上主義の時代には見えなかった世界を垣間見せた。人々が何を求めているかをさらけ出した。感じさせた。そして、バーチャル社会とリアル社会の融合の加速化は、集中と分散のあり方にも再考を促した。地方の「ねざす権利」のあり方も変わらざるを得ない。こうした時代の動きを踏まえた地方創生とは如何。

2. キュレーション「関連情報&Topics」: コロナ禍×イノベーション×地方創生

▼人生 100 年時代、人生の時間配分を変え、価値観を進歩させよ 駒村 康平 氏(慶應義塾大学経済学部教授) リクルートワークス研究所 2020 年 11 月 16 日 <https://bit.ly/2l0xxKE>

人生 100 年時代において、人口構成の 67%は 40 歳以上であり、長寿化をみすえた各種の取り組みが必要との問題認識による提起である。人の能力には、「結晶性知能、伝統的知能、流動性知能」があり、「情報処理のスピードや直観力、瞬発力などの流動性知能は加齢により低下するが、洞察力、対人折衝や理解力、言語能力などの結晶性知能は高齢期になっても改善して高止まりする」ので、結晶性知能(いわゆる経験知と思量)を積み重ねるべきであり、そうした知を持った人を生み出す仕組み、活用する仕組みを企業等は考えるべきではないかという提案がなされている。特に、そうしたことの妨げになっている「中高年の価値観が同質的すぎる」ことを避けるためには、中高年が関わる「コミュニティを増やすことが有効」であり、現役時代にこそ、サバティカル休暇、副業、職能団体参加、社会貢献活動等により「価値観を進歩するための学び」を行うべきと提起している。こうした多様な学びの価値感に基づく人達が増えれば、地方創生において、必要とされる多様な人材が増える。人の生き様の観点から、いろいろ考えさせられるレポートである。

▼域内循環型の経済を目指せ 地方創生の視点 中村 良平(岡山大学大学院社会文化科学研究科教授) 2020 年 11 月 13 日 独立行政法人経済産業研究所 ※2020 年 10 月 22 日 日本経済新聞「経済教室」に掲載 <https://www.rieti.go.jp/jp/papers/contribution/nakamura/17.html>

東京からの目線で語られることの多い地方創生論を地方の目線から問いかけたレポートである。そうした視点で見たときの課題として、「①潜在的な稼ぐ力を持った基盤産業を見いだせていない、②移出先の偏在と固定化(ブランド型 1 次産品の出荷先が東京市場に大きく依存)、③「BtoC(消費者向け)の消費活動、BtoB(企業向け)取引の地域循環が不十分」と指摘している。この課題克服に資する取り組みが、「草の根的な経済循環を構築する取り組み」であり、その事例として地元の商工会を決済業者となる「電子マネー機能付き IC カード(地域 IC カード)」を紹介している。「地元での買物にポイントを付与するだけでなく、ウォーキングの推進や健康診断、ボランティア活動、議会傍聴といった多様な町民活動に対しポイントが付与され、地元の加盟店で利用でき、町内経済のみならず、疎遠化する地域コミュニティの維持活性化にも貢献している」とのこと。一市町村ではそうした「循環の維持・継続が難しいときは広域圏化」すればいいという指摘も納得である。カード発行にはブロックチェーン技術の応用も可能であり、経済的に自律するための地方創生策の基盤としてイノベーションを興しうる可能性を秘めている。

▼遠隔診断、薬はドローンで 106 人の島が未来の世界に 2020 年 11 月 21 日 9 時 30 分 朝日新聞 DIGITAL <https://www.asahi.com/articles/ASNCN6SZMNC6TOLB003.html>

長崎県五島市三井楽町の離島、嵯峨島(さかのしま)でのインターネットやドローンを利用した遠隔医療の実証事業(五島スマートアイランド実証推進調査協議会。10 月 5 日~来年 2 月 12 日までの)を報じている。確かに、離島とか、高所とかに住む人にとって有効な仕組みである。どんどん進めて欲しいが、いつも疑問に思うのが「実証」と云う位置づけである。今できることから「導入」し、適宜改良して行けばいい(アジャイル方式)と思うだが、すべからく既存の枠組みにないことは常に「実証」扱いとなる。これでは、いつまで経ってもイノベーションは起こらない。

▼アフター・コロナの「移動」の形とモビリティの在り方を考える～定型的な輸送業務から、高付加価値化した移動サービスへ～ ニッセイ基礎研究所 2020年11月10日 <https://bit.ly/2ViaEVU>
コロナ禍は、新たな行動様式(モビリティ行動)を惹起し、コロナ禍以前から、厳しい経営環境にあった交通事業者に抜本的な対応を求めている。本レポートは、こうした状況を「俯瞰」する上で役立つ。また、本レポートでの対策提案として、「高付加価値化した移動サービス」の提供を挙げ、その具体として、①『衛生面の安全性』を高めること:移動の時間、距離、機会(回数)、乗合人数、モビリティなどを縮小する『ダウンサイジング』と、自動運転を実装するなどの『非接触』。②『利便性』を高めること:移動機能を付加したサービスを行うなど、モビリティを用いたサービスを多様化すること、そして、移動にかかる身体的・心理的負担を軽減したり、手間暇を省いて人々の可処分時間をあげている。しかし、地方からみた現実論としては、マストランジット指向の交通手段(例えば、鉄道、路線バス)をダウンサイジングするよりも、個別輸送指向の交通手段(例えば、タクシー)のアップサイジング(乗合タクシー化)の方がサービス品質向上の容易さと経営的成立の可能性が高い。タクシー型の方が雇用創出にも繋がる。自動運転車両の導入に拘らない“タクシー以上バス以下”の移動サービスを基軸とした地方版 MaaS が求められている。

▼住まいを「終活」する ～これ以上、空き家を増やさないために 明治大学 政治経済学部 教授 野澤 千絵 JIR NEWS 2020 OCTOBER 常陽産業研究所 <https://bit.ly/2KN7PdQ>
「空き家問題の特性は、時間が経過すると、所有者等も高齢化し、空き家対応への負担感増大。更に代替わりで、相続人等も増え、処分の手間・時間・コスト増大」との認識の下、空き家問題をフェーズ0～フェーズ5に至る問題と対応の枠組みを整理している。このフェーズ論に基づくと、「少なくとも、フェーズ2の『利活用可能レベル』までに売却や賃貸化といったアクションをおこすよう、これまで以上に積極的に促さなければいけない」と提起している。その具体として、「住まいの就活」「住まいのエンディングノート」を提案し、その推進者として、地域金融機関やまちづくり団体の存在をあげている。空き家問題は、世帯構造(独居高齢世帯の太宗化)、住宅保有形態(実家相続放棄)、後期高齢者を中心とする福祉問題、コミュニティ・まちづくり問題等が絡み合った問題が空間事象として目に見える形で表出している。これは単に空き家という物理的問題ではなく、包摂的に地域として取り組まなければならない社会的問題である。本レポートは、そうしたことに思いを至らせるレポートである。

▼人が去ったそのあとに ～人口減少時代の国土デザインに向けた生物多様性広域評価～平成28～30年度 国立環境研究所研究プロジェクト報告 第136号 <https://bit.ly/3lnQ5Sz>
これは、上記の「住まいの就活」の「国土の就活」版とも云える研究報告である。日本の人口減少の結果、「2050年には現居住地域の2割が無居住化する」ことが予測され、「農業や草刈りなどの長期間続いてきた土地利用や土地管理が停止し、それによって維持されてきた生物多様性は衰退の危機(生物多様性第二の危機)にある」とのこと。本研究の結果、「人口減少下においても、人口分布の均一化や種の分布の相補性に基づく保護区の設置により無居住化の負の影響を緩和できることや、耕作放棄前後の手入れの違いにより、その後の植生変化が大きく変化することが明らかになった」とその成果を報告している。人口的な土地利用がなされていた区域を如何に適切に「森化」していくか。放棄するのと管理しながら“森に還す”のでは、そのパースペクティブが大きく異なってくる。国土デザインや地方創生における重要な視座をこの研究は提示している。

3. 紹介「海外に学ぶ」:工業都市から欧州文化都市へ再生 Glasgow(スコットランド) その2 (Japa 理事 小畑きいち:青山学院大学元客員教授)

欧州文化都市へ

1980年代に、欧州文化都市(European City of Culture)(注:1999年より名称を欧州文化首都 European Capital of Culture に変更)制度が発足、文化面で欧州代表する都市を巡回で選び、文化都市開発の契機とするために1年間該当都市で文化事業イベントなどを開催する制度で、それまでアテネ、フィレンツェ、アムステルダム、ベルリン、パリなど文化的な都市が選定されていた。

これらの都市とまったくイメージの異なるグラスゴーが立候補した。この立候補は驚きを持って迎えられたが、文化創造運動への強い思いと努力の結果グラスゴーは、1990年に欧州文化都市に選定された。1990年のグラスゴーは、全欧州からの来訪者、アーティストを迎えフェスティバル・イベントなど数多く開催され、市民参加なども含む長期的なプログラム実施で、地域の活性化の大転換期とした。さらに地域の盛り上げの成功は多くの市民にグラスゴー住民としての誇りをもたらした。この選定によって文化創造都市としてグラスゴーのイメージの一新に大きく寄与した。

この成功は、他の欧州都市に驚きを与え、これ以降都市再生の模範例となった。グラスゴーの都市再生事業は続き、1990年は、Glasgow Royal Concert Hall を開設、同年には、英国の“UK City of Architecture and Design”に認証、1999年、中心街にある800m、幅員20mの緩やか傾斜するブキャナンストリート歩行者専用道路に改修、坂と沿道商業の洒落た景観形成とし、さらにソーキホールストリートも遊歩道として整備し、1.3kmの歩行空間整備で楽しめる歩行回遊路の提供、2011年はプリツカー賞建築家であるザハ・ハジドによるリバーサイド博物館がクライド川沿い再開発地区に新たな観光スポットとして彩を添えた。



ロイヤルコンサートホール



ブキャナン・ストリート
(歩行者専用化)



リバーサイドミュージアム

この一連の文化創造化推進事業により、グラスゴーは「文化」による再生を果たし、英国内外における最初の都市再生の見本となり、他の都市の再生モデルと評価されるようになった。海外からの来訪者は年間400万人超、新産業の創造により雇用も創出され、グラスゴーの人口は再び増加し、都市再生に成功した。そして都市再生をさらに持続可能にするため、来訪者の視点だけに捉われず市民の観点から見た指標項目「The Glasgow Indicators」として「人口、経済参加、貧困、健康、社会資本、環境、コミュニティの安全、人生設計、文化的活力、協調性を有する生き方」など快適都市への項目も明示した。

2008年には、シティ・カウンスルが地元のアーティストを認可サポートし、数多く街角で見られるストリートアート(ミューラル:壁画)の場を壁画アーティストに与え、街を明るくかつ歩くことが楽しい景観を目指した。この結果、グラスゴー街路は現代を象徴しポップカルチャーの街としてのイメージも高め、若いアーティストの注目を浴びている。



市内を楽しく彩るストリートアート(Mural)

このような「欧州文化首都」プロジェクトを通じて、グラスゴー市は文化創造都市(Creative city)と認識されに至った。この成功によって、後の Tony Blair 政権によるクリエイティブ産業の創出・育成のために関連する政策省庁の統合にも及んだ(現デジタル・文化・メディア・スポーツ省)。メディア・テクノロジー、ゲーム、デザイン、音楽、アートなどの振興分野として 13 分野が定義され、政策面にも影響し引き継がれ、一地方都市の成功が中央政府の政策までに及んだ。

再活性化したグラスゴーで、数多くの新ビジネスの創生、グラスゴーへ進出を目指す企業の増加、また若者などが勉学またクリエイターとして域外などから来訪・移住が促進され増加した。グラスゴーが“欧州文化都市”への立候補に際して、当時一笑ものであったが、1990 年に文化により都市再生のあり方に対して実証されたことで英国での文化創造都市のはじまりはグラスゴーとまで高く評価されるようになり、都市における文化の役割についての理解が高まった。

かつての衰退工業都市が、再生実施に向けて組織を再構成し、マーケティング手法を駆使し、既存の埋もれた文化資産の再評価、街構造・景観の改造・修景、荒廃した旧港湾・工業地域の文化施設・イベント会場への転換などの再開発プロジェクトによる文化創造による都市再生は、ナント、ビルバオなどへの都市再生への見本ともなった。グラスゴー市における基本理念は、「来訪者と住民の満足」にある。2013 年より、「Future City Glasgow」プロジェクトにより、産業振興など地域経済に供するために交通管制、犯罪防止、公共交通運営、スマート街灯システム、エネルギー管理など広範な分野に及ぶ計画により、スマートシティー化を促進している。

参考・出所:

- (1) <https://www.glasgow.gov.uk/> & <https://www.glasgow.gov.uk/cdp> City Development Plan
- (2) “Glasgow: The Socio-Spatial Development of the City”, Michael Pacione, University of Strathclyde 2015
- (3) “Deconstructing the City of Culture: The Long-term Cultural Legacies of Glasgow”, Beatriz Garcia, Urban Studies,2005
- (4) “Cultural Policy as Urban Transformation? Critical Reflections on Glasgow, European City of Culture 1990”, Gerry Mooney, Open Univ. (Scotland), 2004

4. 寄稿:故郷との新たな出会い (アーティスト・クリエイター 丸美由紀)

私の故郷の五島列島福江島は、長崎県の西方に置する離島で、18歳まで住んでいた。以前はよく帰省していたが、両親が離婚し母が不在になってからは行く機会が無くなった。そうした変化から、「故郷」とは生まれ育った場所だけでなく、「母の存在」そのものが故郷なのだと実感した。



高浜海水浴場

地元や行政の方々には、父が生前に大変お世話になった。子供が小学生になり、少し時間に余裕が出来始めた頃に、「地元への恩返し」を考えるようになった。当時、SNSで古代史研究家達が五島について研究しているものを見かけた。私は以前から、五島はインスピレーションを受ける神秘的な場所であると感じていた。ので、「もしかして、歴史を紐解くと何か面白いものが出てくるかもしれない」と思った。



そこで早速、2017年の9月に、SNS上に「五島列島歴史ミステリー」というグループサイトを立ち上げた。

<https://www.facebook.com/groups/mystry510/about>

FACEBOOK(以下FB)のグループサイトは、あるテーマに対して関心を持つ不特定多数の人々が集まり、情報を寄せてくれるので、何かを調査したり研究する際の情報収集に役立つ。このSNSの特性を活かし、五島の古代史情報を集め、新たな観光資源や観光ツアーを創出するという、これまでに無い新しいプロジェクトを開始した。



堂崎天主堂

五島列島の古代史研究に関しては、古代史研究家の籠谷道明先生や、五島出身の医師の五島高資先生による長年の研究内容と、今は亡き松野尾辰五郎氏の著書「日本国家の起源—五島列島に実在していた高天原」の内容をベースにし、ネット上に集まった情報を加えて仮説を立てた。そして、情報収集開始から2年後に、サイトに集まった情報をレポート化し、五島市にプロジェクト概要の提示と、支援の要請を行った。



弘法大使空海像

情報をまとめていくと、いくつかのキーワードが浮き彫りになった。失われたユダヤ十支族、ヘブライ、空海、倭寇、平家(=五島家)、キリシタンなどだ。これらは共通要素で繋がっていると直感した。

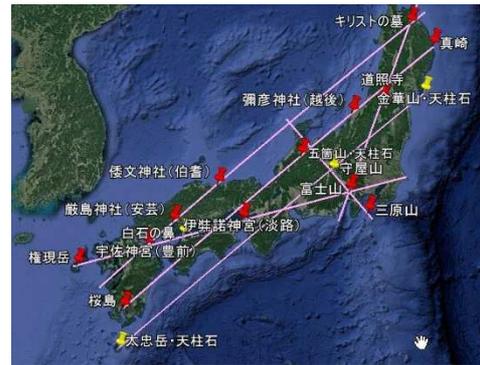
〈五島列島 歴史ミステリー概要〉

世界各地の古代遺跡、ピラミッド山、磐座、一宮は、全て12000年前の極点であるハドソン湾極の緯度・経度に基づき位置決定されている。12000年前に極移動があり、それ以前はハドソン湾に北極があった。6本の地球周回レイラインで結ばれ、そのうち2本が日本を通過し、鹿島神宮と伊勢内宮を位置決定している。



写真提供:籠谷道明

全世界のレイラインの中心は「ハドソン湾極一キリストの墓ー富士山山頂ライン」である。その一部が五島のピラミッド山や沖ノ神島神社の王位石(巨大な磐座)を結んでおり、全世界のレイラインや聖地とリンクしている。



写真提供: 籠谷道明

兵庫県の淡路島で発見された、イスラエル「失われた十支族」の遺跡に関心が寄せられているが、紀元前660年に淡路島に上陸したユダの預言者イザヤとイスラエルの民は、その前に九州の西側の島々を制圧した。イザヤ集団はレイラインを形成しながら東北まで移動するが、五島にもレイラインが形成されている。(古代史研究家・籠谷道明氏の説)



淡路島で発見されたイスラエル十支族の遺跡

野崎島にある沖ノ島神社裏に設置される巨大磐座「王位石」



松野尾辰五郎氏の著書

また、『古事記・神代篇』に出てくる沢山の神名が五島にある多くの地名と極めてよく似ていることなどから、五島列島が「古事記」に出てくる高天原であり、神代の物語は五島が舞台であったという説もある。

本プロジェクトは「五島列島 歴史ミステリー」の情報収集と解明を進め、五島に潜む遺跡や、歴史、特異な文化や風習などをコンテンツ化(観光資源・観光名所化)することを目指している。発足から3年経ち、600人が参加している。五島を訪れたことの無い島外の人も多いが、メンバー同士の交流も進み、今では「アットホームなコミュニティの場」として発展している。

最近では、私も定期的に五島を訪れて、現地調査をしたり、地元のお店や観光地取材し、「五島の魅力」のPRに努めている。古代史情報、研究会メンバー、地元住民、地元産業、観光情報、行政イベントなどをコラボさせ、観光や産業の振興を高めていくことと、移住者が増える中、住民同士のコミュニティも支援している。



地元の皆さんとの交流会

私自身、この活動を通して故郷への関心が深まり、五島の素晴らしさを再認識させられた。コロナ禍で都会の生活での閉塞感が高まる中、地方における人と人との温かい繋がりがや相互扶助、自然環境がもたらす四季折々の風情など、今後益々見直されていくのではないだろうか。

5. 稽古照今・寄稿:童謡爺さんのどうよう語り

作詞作曲家 高橋育郎

(第一話)

童謡爺さんなんて、あまり聞きつけないよね。

歌というと、どうしても歌のお姉さんとかお兄さんになるね。若さ溢れた元気いっぱいイメージだよ。どっちもNHKだけ。そうそう、そういえば、昭和26年ころ歌のおばさんというのがあったな。松田トシと安西愛子のお二人が、「こどもの歌」をうたって、おおいに活躍していた。この時、童謡という言葉をやめて「こどもの歌」としたのだ。童謡に改革の風を吹かせたというところか。それはともかく、二人はそのとき、まだ若かったから、おばさんと呼ばれるのは抵抗があったんだ。ところがディレクターにおばさんになるまで続けてもらいたい番組にするからと言われて、まあ納得したというわけだ。そのおばさんが終わったあとは、お姉さんやお兄さんに引き継がれ、いまに及んでいるわけだよ。

わたしは今年(2007)72歳になった。いつのまにかなくなってしまったといった方が当たっている気がするよ。いずれにしても72歳といえば、爺じと呼んで歳に不足はなかろう。いや、不足ないどころか立派な爺じだ。いくら長寿時代になったといってもね。ただ日野原重明先生にいわせれば、まだまだ若いといわれてしまいそうだけど。

でも、いわれる前にわたしも若いつもりだ。それで、実のところ好きな歌をうたって、歌の会などやっているというわけだ。勿論、歳の事などそんなに気にしているわけではない。(そりゃ、少しは気にしていますよ)

さて、これから童謡語りを始めるにあたって、自己紹介から始めるのが妥当だろう。

できるだけ手短かにいきたい。まずは今の状況から。最初は平成4年に始めた「心のふるさとを歌う会」で、会場は中央区八丁堀の都勤労福祉会館。平成8年4月から人形町の日本橋社会教育会館へ移る。ここは人形町にある日本橋小学校と併設になっているんだ。



そして平成5年に西新橋で「円塾倶楽部」ができて「童謡・唱歌の会」を始めた。3年間やった。

次は、朝霞市の滝の根保育園で平成13年に始めた「めだかの学校・歌の会」。3番目は、荒川区町屋の「ぬりえ美術館」で平成14年に始めた「ぬりえ童謡の会」。そして4番目が、JTBカルチャー・サロンの講座「愛唱歌をうたおう」ということで、四つの会がでそろったわけだ。

かっこよく言わせて貰えば、みんな大事な宝物というところかな。本当に。

わたしが童謡に取りつかれたというか、そもそもの結びつきのルーツを、探求してみたい。なんて、大袈裟にはいるが、簡単にいえば、生まれつき歌が好きだったということに過ぎない。

物心ついた3歳のとき、隣のおばさんが歌好きで、子供がいなかったせいもあったろうか、めっぼうわたしをかわいがってくれた。よく外出するおばさんだったが、家にいるときはわたしを呼んでくれて、童謡を教えてくれたり、絵本を読んでくれた。憶えた歌を羅列してみると「雀の学校」「アメフリ」「ハイタイサン」「靴が鳴る」だった。だからこの歌を歌うと、そのあたりの情景が、ほんわかと思い出されてしまうのだ。(小学校の音楽の先生だったと後で知った)

思い出の中で、歌の記憶は特に強いものがあるね。メロディーというのは歌詞以上に憶えているものだ。何故だろうか。最近では脳の研究が一段とすすんできているから、この辺の仕組みは解明されると思うのだが。

それから、わが家は、また引越しをした。4歳のとき、すでに3度目になった。この3度目も京浜東北線の赤羽駅近くだったのだ。ここでは国民学校(小学校)の3年生までいたから、爺の第一のふるさととっていいだろう。懐かしい思い出が充満している。ここでは、母から童謡を教えられた。憶えた歌を羅列してみると「雨降りお月」「赤い靴」「青い目の人形」「夕焼け小焼け」「お山の大将」「シャボン玉」「どんぐりころころ」「黄金虫」「からくり」「でんでん虫」「証城寺の狸ばやし」「桃太郎」「金太郎」だった。そして「一寸法師」は父からだった。まさにわたしの心のふるさとの歌といえるね。中で「どんぐりころころ」は、常会(町内会)で独唱したから特別な気持ちで記憶している。

- ※ このお話は2007年(平成19年)に書きました。
- ※ 安西愛子 平成7年に安西愛子主宰の「良歌保存会」の会員になる。新宿安田生命ホール 駒場エミナースに出演した。8年、先生が病気になられ、会は解散した。2018年に百歳で亡くなられた。
- ※ 日野原重明 平成29年7月 105歳にて死去。(童謡歌手で元 NHK 歌のおねえさん稲村なおこの後援会会長)
- ※ 都心では人口減少がみられるようになってきた。小学校に空きが出てきた。そこを区の教育委員会が活用して人形町に日本橋社会教育会館を造り、生涯学習の場に充てた。平成4年に爺は「心のふるさとを歌う会」を始めた。人形町に移ったのは8年5月から。それから10数年して高層マンションが増えてきて、人口は再び増加し学校の教室は満杯状態になってきた。そこで会場は平成29年に地下室の空き部屋へ移った。ここ日本橋小学校は、元西郷隆盛の屋敷跡である。
- ※ 2011年に読売カルチャー教室から講師の依頼があったが、現行以上に増やせないところから、童謡協会の方に代わってもらった。
- ※ 今年2020年は、童謡が誕生して102年に当る。

「童謡100年」記念コンサート
日独こどもの歌交歓会

ドワ・カールスルーエ独日合唱団
「ザ・アップル・ブル」
札幌市立南郷小学校(札幌市南區南郷7丁目)
中野昭子(ソプラノ)・藤原(オーボエ)
「童謡の歌」/ 日本橋音研ほか

活動写真家土井博一さんと
児童舞子の活躍舞台による
舞踊劇上演

日本橋女声合唱団
「まてふふるさと」ほか

大西ようこ(ソプラノ)
菅野良子(マリンバ)
「おひさま」ほか

心のふるさとを歌う会
「朝歌」ほか

主催
心のふるさとを歌う会
高橋有希 03(0)7252-3104
t-kiso@sirus.ome.jp

2018年8月27日(月)
開場 13:00 開演 13:30
日本橋社会教育会館
5階ホール
(東京府の人形町地下鉄徒歩5分)

入場料 1000円
小学生 500円
未就学児 無料

後援 日本童謡協会 童謡100年プロジェクト 生涯現役推進協議会 山岡教育研究会

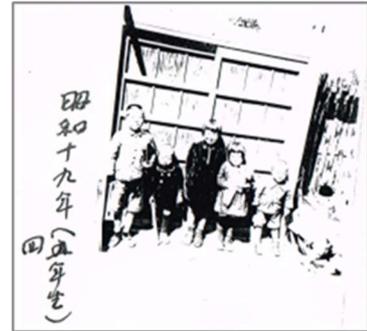



(第二話)

童謡爺さんなんて、勝手なことをいっているが、変な男が出てきたものだ。一体、何者なんだと、思われた向きが多いのじゃなかろうか。何事も順序というものがあるって、やはり自己紹介から始めんと、いかんね。

そこで遅ればせながら、自己紹介をさせていただこう。

昭和10年の早生まれ、だから昭和一ケタの最後の年代で、小学校は国民学校に変わっていた。爺は小学校を卒業していない。(聞く人はいったんは驚く)純粹の国民学校生だ。いうなれば戦争の落し子であって、極めて希少価値のある存在だと思っている。そんなわけで、かつて「実録小説 ああ国民学校」を著し、世に出した。



音楽は「唱歌」が「音楽」に変わったものの、全くと言っていいほど、内容は相変わらず唱歌であって、楽典などは教えてもらえなかった。だから爺さんたちの年代は、音楽コンプレックス世代と呼ばれているのだ。音楽は苦手意識があって、つい敬遠してしまう。でも、爺は歌うのは好きだからカラオケが始まった時は喜んで飛びついたものだ。爺だけじゃない。大方の中高年者がカラオケ好きだった。

さて、音楽好きだったから高校生になって、合唱団に入り、楽典を知った。それから就職した国鉄でも合唱団に入って、実体験を踏まえながら知識を身に付けたというわけなんだ。そして歌唱はもとより、指揮法、作詞作曲法の本を読んで身につけて行った。

国鉄現職中に、作品がレコード化されたり、団体旅行のお客さんの前で、歌のサービスをしたり、国鉄職員らしからぬ体験をしたのがもとで、退職後の第2の人生は、国鉄の引かれたレールから飛び出して、音楽の方へ乗り換えてしまったんだ。まさに冒険への道だね。



そこで先輩に誘われて音楽イベントの仕事をやったのが始まりだった。でも、そこは順調とばかりはいかない。紆余曲折、試行錯誤があったなかで、幸運なる偶然に出会えて、歌の道に入れることが出来たんだ。

苦勞?の末に掴んだ幸運か。忘れもしない平成4年12月「心のふるさとを歌う会」を旗揚げすることが出来た。そこにはライフ・ベンチャー・クラブ(生涯現役の会)や日本レクリエーション協会で生活余暇開発士の資格を取られた方の絶大な支援があった。自分ひとりの力じゃ絶対できっこな

い。人様のお陰は常に付いて回る。感謝、感謝。爺は人脈は金脈と心得ておるのじゃ。

そしてほぼ同時に憧れの日本童謡協会に入会できた。協会には一流の作詩家、作曲家がおられる。いくなればプロ集団だね。爺はいろんな歌が好きだけど、やはり童謡は自分に一番向いているなと思っているんだ。

今年(编者注:2007年)は、この会も15周年だ。ひとつ種が蒔かれ、芽が出ると、それが幹になり枝葉が広がるもので、5、6年前に、朝霞市保育園、町屋のぬりえ美術館で、それぞれ童謡の会が発足し、更には昨年10月、JTBのカルチャー・サロンで「愛唱歌」の講座を始めるに至った。

そういえば、朝霞市の前に、西新橋で始まったカルチャー教室「円熟倶楽部」の講師に推されたのが最初だった。3年間の経験だった。

童謡作品も幾つつか作り、童謡祭で歌われ、自己実現に邁進中というところだね。では。

花よ ジャスミン 斉藤信夫作詞 page
高橋いくを作曲

♩=100

かある かある あさのーま どー
かある かある さるのーま どー

ま る で ほなかこ ほちから のーびて
ほ な ほ ほしかた からす どーごーしに

お き て おきてと ほほえ み かける
ね て よ ねてよと ささや き かける

う す い ピンクの ほな ジャスミン
あ ま い ピンクの ほな ジャスミン

花よ ジャスミン
かある かある 夜の窓
花ほ 星かた
からす 戸越しに
寝てよ 寝てよと
ささやきかける
あまいピンクの
花よ ジャスミン

花よ ジャスミン
斉藤信夫作詞
高橋いくを作曲

(つづく)

- * 2001年の童謡祭で歌われた「大きな木はいいな」(作曲・白川雅樹。うた大和田りつ子)は、翌年の全国サミット(豊川市)で、21世紀の愛唱歌になって、カワイの「みんなの童謡」曲集に載り、2010年「全国童謡歌唱コンクール」で、大人の部の金賞を受賞した。歌唱は豊田市の宮内真理。
- * 国鉄在職中の昭和 43~55 年の間は、東京~千葉間線路増設工事に伴う駅舎改良に関わり、多忙を極め、歌えるゆとりが全く無かった。ただし 56 年には、この仕事から解放され、団体旅行のお手伝いをした。そこで団体旅行音頭やお座敷電車の歌など 4 曲のレコードを出した。
- 国鉄を退職して、音楽イベントの仕事に就き、そこでめぐり合ったのがライフ・ベンチャー・クラブ(人生冒険)の生涯現役であった。
- * 「ぬりえ美術館」は、山岡鉄舟研究会の山本紀久雄会長の紹介で始まったもので、10 年間にわたった。

6. 解説「関連データ・用語・仕組み」：テロワール、スローライフ、ロハスとは

テロワール(Terroir)とは、「土地」を意味するフランス語 *terre* から派生した言葉で、もともとはワイン、コーヒー、茶などの品種における、生育地の地理、地勢、気候による特徴を指すフランス語である。(出典: フリー百科事典『ウィキペディア』 <https://bit.ly/39uDJ95>)

ワイン業界人による [note「そもそもテロワールとは何か？」](https://bit.ly/36oZJQM) <https://bit.ly/36oZJQM> によると、「テロワール」(terroir)というフランス単語に対応する英語や日本語の単語はなく、一番近いのは「生育環境」や「風土」とのこと。定義としては、「ぶどうの生育段階からワインの瓶詰までの間に、品質に影響を与える全要因の質的合計」で、その質的合計を各構成要素に分解すると、「テロワール」=「土地+気候+人(思想+技術)+設備」ということになるらしい。

最近はこのテロワールという概念が、「ワインやコーヒーなどの作物は、テロワール(土地の特徴)の影響を受け、その土地特有の性格を持つようになるわけだが、作物だけでなく、建物や町並み、そこに住む人々の暮らしなども同様にテロワールにより特徴づけられると考えられる」([note テロワールとまちづくり](https://note.com/oteen/n/nfd4c64cf17e5) <https://note.com/oteen/n/nfd4c64cf17e5>)といった文脈で、まちづくりあるいは地方創生において語られることが多くなってきている。

「テロワールとは、土地の個性が品質であり、それが美意識・価値観にまで昇華した形で消費者に浸透すると、他所では真似ができなくなり、ブランドとなる」というマーケティング的な援用([地方創生の近未来 ~伝統の現代化とスマートスプロール~](https://bit.ly/37hSYPS)) <https://bit.ly/37hSYPS> は、地方の魅力を引き出し、ひいてはブランド化に繋がる。それが地方創生の道であるとの示唆が得られる。

スローライフ(Slow Life)とは、地方の魅力の一つである「地方に根づくゆったりした生活を肯定し、人生をゆったりと楽しもうという考え方」([コトバンク](https://bit.ly/39ps2Aq) <https://bit.ly/39ps2Aq>)の抽象的な和製英語である。[ブログ【スローライフとは何か?】](https://amba.to/3o9Qg5D) <https://amba.to/3o9Qg5D> によると、「スローライフとは、暮らしに緩急をつけること」であり、「wikiの『ゆっくりした暮らしを提案する』に対する答が『緩急』であり、「丁寧な暮らし」とは微妙に異なるとされている。さらに、「スローの勧め」<https://bit.ly/36qc7zT> では、「自分の時間を作る事。それを楽しむ事。その為の時間を作る事。全部をゆっくりやれと言うわけではなく、ゆっくり楽しむ時間を作る事が大切」とされている。

平成19年9月22日に定められた「[スローライフまちづくり全国都市会議・スローライフ憲章](https://bit.ly/37lfVS9)」<https://bit.ly/37lfVS9> の前文には「スピードや効率性は大切にしつつも、都市環境や市民生活のありようについて本質を見極め、先人より培われ今に息づく『ほんもの』を大切にする価値観により、一人ひとりがより人間らしく自然に、ゆっくり、ゆったり、豊かな心で生きていけるような社会『スローライフのまちづくり』が必要である」と記されている。

LOHAS(ロハス)とは、Lifestyles of Health and Sustainability」の略語で、「心身の健康、持続可能な社会や地球環境を無理なく追及する、心豊かに暮らす生活スタイル」の意味で、目先の利益よりも、10年後、100年後の地球を見据えた暮らし方を指す」とされる。いまでいうSDGsに通じる暮らし方とも云える。

また類似する概念に、「エコ」という言葉がある。「地球の生態系や環境を守るためのライフスタイル」を指すエコに加えて、ロハスには自身の健康も持続的に保つ「Health(健康)」という意味が含まれる。(LIDEAS FOR GOOD LOHAS(ロハス)とは・意味) <https://bit.ly/39wsD3s>

7. Blog 仕組みの群像:高齢者の住まい方「シニア・シェアハウス」について

空家活用の一つの形として、シニア向けシェアハウスが考えられるのではないかという視点から、その背景を含めて整理した。団塊の世代(出生時 806 万人⇒2019 年時 618 万人)が 2022 年には後期高齢者層に突入する今後において、その居住のあり方、暮らし方等は福祉問題とも絡む大きな社会的課題であり、包摂的なソリューションが求められる。そうした想いでブログにしたためた。

▼Blog 仕組みの群像:高齢者の住まい方「シニア・シェアハウス」について

<https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/>

8. つぶやき(編集後記に代えて)

「平井卓也デジタル改革担当相は 11 月 17 日の定例会見で、中央省庁の職員が文書などのデータをメールで送信する際に使うパスワード付き zip ファイルを廃止する方針であると明らかにした」というニュースが流れ、話題を呼んでいる。その理由として、「セキュリティレベルを担保するための暗号化ではない」「メール内容をスマホで見れないのは致命的」があげられている。

▼霞が関でパスワード付き zip ファイルを廃止へ 平井デジタル相 2020 年 11 月 17 日 19 時 01 分 公開 ITmedia NEWS <https://bit.ly/2KRcVFz>

▼「パスワード付き添付ファイル」が無意味どころか社会の害になる理由 及川卓也 2020.10.28 4:05 DAIMOND online <https://diamond.jp/articles/-/251961>

セキュリティ確保と受発信の便利さのバランスは、テレワーク時代には特に重要となる。今後は、インターネット上のフォルダー(オンラインストレージ)を利用する方法が標準になると思われる。そして、改めて認識させられるのがスマホの存在である。確かに ZIP ファイルはスマホでは開けない。そういえば、大学講義(オンデマンド講義)の動画アップを Moodle(オンライン学習支援プラットフォーム)にアップするが、学生がスマホでも視聴する際に読めるように、資料のテキスト文字のフォントの大きさは22ポイント以上にするように奨められている。スマホの影響や恐るべし。

■ 本メルマガは、専門家相談窓口サービスを併せて提供しています。

Japa 日本専門家活動協会(本メルマガ編集者及び理事メンバー)が窓口となり対応させていただきます。本メルマガの内容に係るご相談・お問合せは下記要領にてお願い致します。

件 名:メルマガ「コロナ禍×イノベーション×地方創生」について

属 性:所属組織名、氏名、役職、E-mail アドレス

問合せ・相談内容:具体的に記載下さい。

送信先:info@japa.fellowlink.co.jp

編集発行人:Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典

問合せ・連絡先:info@japa.fellowlink.co.jp

発行元:Japa 日本専門家活動協会 <http://www.japa.fellowlink.jp/>

Copyright © 2020 Japa 日本専門家活動協会